氷廠

佐伯富

一

甬江を遡航して鎭海に至ると、兩岸には錐形草蓋の建築物が楊柳の間に多數連つて見える。これが氷廠と稱せられる氷の貯藏所である。往時ある武將が兵を率ゐて此處に來り、之を遠望してその如何なるものであるかを土民に問うたところ、土民は答ふるに氷廠を以てした。武將驚きて何ぞ兵廠の多きやとて、旗を捲いて逃れ去つたといふ話がある。蓋し、兵と氷とは支那音が相通ずるからである。① こゝではかゝる話の眞僞は問題ではない。それほど鎭海から寧波に至る甬江の沿岸には氷廠が無數に立ち並んでゐる。その正確なる統計は不明であり、時代によつて增減もするが、鄞縣通志食貨志の傳ふる所によれば、民國二十年頃の概數と思はれるが、「寧波の和豐紗廠より以東、鎭海の江北方面に至るまでの間に、鼎盛の時には千數百廠を數へた」といふ。殊に梅墟鎭一帶の沿江十支里の地に櫛比する有樣は確かに一奇觀たるを失はぬ。

然らばかゝる多數の氷の貯藏所が特に邊陬の地に設けられたのはいかなる事情によるものであらうか。これについては鄞縣志(乾隆)卷二八、物產の條に

甬東濱江居民。多藏冰爲業。謂之冰廠。夏初鑿取以佐海魚行遠。

とあり、又

甬江漁船。當漁汛期。至由奉化江。揚帆

而來。經過東鄉、梅墟江濱。必購冰貯艙下。使船載重。始可浮海。及在定海洋面。漁獲而歸。將販之甬上之魚行也。（鄞縣通志食貨志）

と見えてゐるやうに、甬江沿岸の冰廠の設立は支那の一大漁場たる舟山群島の漁業と重要なる關係があることが自ら明らかであらう。

この冰廠は鄞縣通志食貨志に

冰廠多爲濱江農民之副業。

といへる如く、元來農民の副業として起つたものである。最初は寧波地方に限られてゐたやうであるが、次第に甬江を下つて鎭海にも及び更に穿山の地方にも傳播したやうである。鎭海縣志民國卷四二物產の條には

鎭邑向無冰廠。近則沿江多搭蓋矣。鎭海備志

近時穿山後所一帶。亦頗獲冰廠之利。采訪册。

と言つてゐるのは冰廠建設の傳播の迹を示すものと考へられる。

然らば何故に冰廠は最初に寧波に發生したか。それは甬江の漁民が主として寧波人であつたからである。

このことは先にも引用したが、

甬江漁船。當漁汛期。至由奉化江。揚帆而來。經過東鄉。梅墟江濱。必購冰貯艙下。（鄞縣通志）

とある記事によつても知ることが出來る。こゝにいふ甬江の漁船とは寧波のいかなる地區のものを指すかについては、鄞縣通志食貨志漁業の條に、（鄞縣建設第一集、計畫調査三六頁同）主なる漁港の所在地並に漁民の統計を示して

大崇港　一〇〇〇人（奉化江と關係なし）
姜　山　二〇〇〇人
東錢湖　五〇〇〇人

と言つてゐることによつて、大體、姜山、東錢湖の漁船が絕對的に多かつたといふことが判明する。

寧波に發生した冰廠は、先にも述べた如く、次第に甬江を下つて鎭海縣地方にも設立を見るが、それは冰廠による利益が甚だ大であつたために、かゝる流行をしたものと考へられる。

鄞縣通志の示すところによれば、普通、冰廠一所を所有してゐると、一年に五百元乃至一千元の利益を獲ることが出來る。この地方に於ける冰廠の利益は年額百萬元以上にも達するといふ。冰廠の大なるものは田十五六畝、最も小なるものも五六畝を必要とする。こ

の田地は冬は水を灌いで結冰させる外、その他の時には、農作に利用することが出來る。寧波に於ける田地一畝の價格は六十元乃至百二十元であるが、②冰廠のある甬江沿岸の田價は一畝につき五百元以上に達する③といはれてゐる。いかに冰廠の利益が大であるかゞこれによつても窺ひ知ることが出來るであらう。

二

遠くから冰廠を望むと、藁葺の屋根がちやうどすり鉢を倒立した如く、暮れゆく江南の平野、或はそぼふる春雨にはぶる楊柳の間に散見する有樣は仲々趣のあるものである。

その構造については鎭海縣志（光緒）卷三八物產の條に

冰廠窖田覆草。中脊建翎。（民國刊鎭海縣志卷四二物產條作瓴是也）前後峻削。不至積雨滲漏。地上藉之。以草通長溝。冬月貯冰至滿。必使封固周密。旁不通風。下可洩水。庶無消化之患。

と見え、又鄞縣通志食貨志の條に

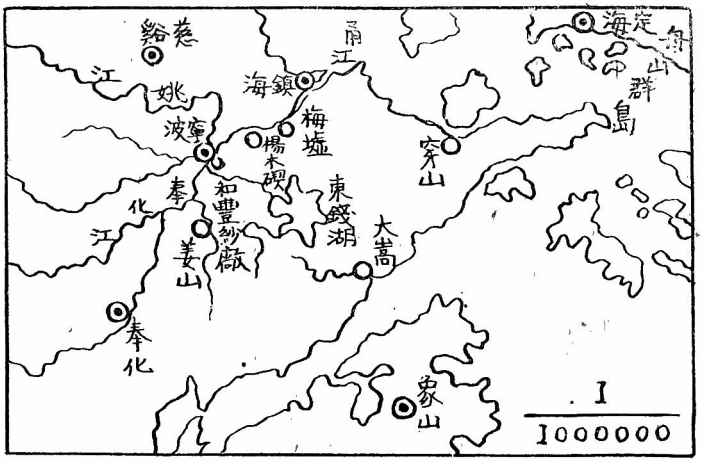
冰廠……支木建廠。茨草其上。掘地爲窪。用以貯冰。

とあり、更に支那省別全誌第十三卷（大正八年刊）五四七頁には

冰廠は土を以て深く氷を覆ひ其上を藁を以て三角形に葺き日光を遮れり。其大さ大抵方四、五間あり。

と述べてゐることによつて大體その一斑を察知することが出來るであらう。

十月以後、氣候が寒冷に赴き、結冰の時節になると、收穫後の田に水を灌ぎ結冰させる。早晨二三時頃、月光に乘じて田中の冰を移して冰廠の中に貯藏する。この仕事に



圖略近附岸沿江甬

從事する者を擡冰と稱するが、多くは近隣の農民を雇傭する。氣候嚴寒で工作が艱苦である關係上、勞賃は普通の勞働者より高く、毎一時間、約二角位である。④春夏の間、漁汛期に至ると、漁船が甬江を下つて、冰廠のある地方に來る。冰廠から漁船に冰を運搬するが、これを挑冰といふ。挑冰も亦農家の子弟の從事する所である。毎擔、途の遠近を計つて價を定めるが、壯健なる者は日に能く銀一元以上を獲るといふ。かやうに冰業による利益が相當大きい關係上、濱江一帶は人口稠密で、農民は懶惰の風を生じてゐる。この地方一帶に賭博が盛に行はれるのも一に冰業による收入から、金廻りが割合に多いからだとせられてゐる。

この冰廠を形成する者に、貰廠と份擡との二種がある。前者は業主であり、冰廠を擡戸に租與する。廠用の材木は貰廠の負擔⑤であるが、竹草、雇傭勞働者その他の費用は一切、擡戸持ちである。但し大抵の場合、多くは擡戸は租價を出さずして冰の賣上高を業主と均分する。そこで、冀年（多寒冷にして冰多き年をいふ。從つて原則的には生產費は多く要するが、賣冰價は低下するわけである）に遇へば、擡戸の損失は甚だ大きい。之に反して業主は損失を蒙ることなく、只利益を受けることが僅少なるに過ぎない。近年冰廠が次第に衰落し始めたのは、舟山群島に於ける漁業の衰微とも關係するが亦冰廠のかゝる機構のうちにも原因が潜んでゐると考へられる。

冰價は漁業の盛衰、及び冬夏兩季の寒暑、從つて又冰量の多少に依つて決定せられる。そこでこの地方の冰業者は漁業の發展を希ふと共に寒暑の氣候に對しては重大なる關心を寄せてゐる。この地方の諺に「靠天喫飯」といふのがあるが、全くこの間の微妙なる心理狀態を穿つてゐる。又この地方には天年、（冰少き年をいふ。從つて冰價は高騰するわけである）冀年といふ成語があるが、亦かゝる間の事情を最も端的にあらはした表現法であらう。

普通、天年に逢へば冰價毎擔三四角であるが、冀年には僅かに三四分、天年の十分の一にしか過ぎない。これを以てしても、冰業者がいかに天候には敏感であるかゞ窺はれよう。民國二十三年の調査によると、和豐紗廠から楊木碶まで二百餘の冰廠の生產額は、嚴寒のため、百二十萬擔にも達し、總價格は十八萬元に過

ぎなかつたといはれる。即ち一擔の價は一角五分となるわけである。⑥

冰業の衰退が以上述べた如く、諸種の原因によるものであることが、明らかとなつて來たが、更に原始的なこの冰業自身についても反省が加へられねばならない。支那省別全誌第十三卷五四七頁には

茲に注意すべきは、當地方に於て魚類貯藏に用ゆる氷にして、這は冬季水面に凍れるものを凍るに從つて、之を搔き集め、氷廠の中に貯ふるなり。……是等の氷は既述の如く、不完全なる方法に由り、得たるものなるを以て、其不純なる事到底我國に於けるものと比すべくもあらず。且大塊なく、悉くザク〳〵せる小粒なり。

と述べてゐるやうに、近代工業の發達した今日、原始的な方法によりて生産せる冰、而も「天」に制約せられる所の冰を以て、果して近代社會の生産部門に互入していつまで競爭をなしうるや否や。併し今尙かゝる冰廠が嚴存してゐる事實は否むことは出來ない。

三

前二節に於て冰廠の最近の大體の概況を述べた積りであるが、吾々にはむしろ冰廠發生の原因、冰廠の歷史に興味が感ぜられる。

冰廠が浙東に於ける漁業の發達と關聯して發生したものであるとすれば、冰廠の起原をたづねんとすれば、當然浙東に於ける漁業の歷史をもふりかへつて見る必要がある。漁業が原始産業の一である以上、漁業の歷史は人と共に古いといふことはいふまでもないので、かゝる點は姑く論外に措くとしても、史記卷一二九貨殖傳に

楚越⑦之地。地廣人希。飯稻羹魚。

と見えてゐるから、春秋時代に已に漁業が浙東に於て行はれてゐたことは事實である。

併し、浙東の漁業が重要なる一産業部門として、社會に出現して來たのは支那の歷史の大勢から考へると、江南が開發せられてから後の事に屬するやうに考へられる。⑧隋書卷三一地理志に

江南之俗。火耕水耨。食魚與稻。以漁獵爲業。雖無蓄積之資。然而亦無饑餒。

と見える事實から考へると、隋代に於ても浙東の地域

は尙未だ充分文明開化の域には達してゐないやうである。⑨明州が國際貿易場として登場するのは唐代からであるが、浙東の漁業も亦明州の發達と相互關係があるやうに推測せられる。元和郡縣志卷二六明州貢賦元和貢の條には

海肘子　橘子　紅蝦米　鯖子　紅蝦　鮓烏蜊骨

とある如く、多數の魚類の名が示されてゐるが、この頃に至つて始めて、漁業が相當發達して來たことを思はしめる。

明州を中心とする浙東地區は宋の南渡と共に大いに開發せられるが、それと共に漁業も未曾有の發展を遂げたやうである。南宋時代から元代にかけて編纂せられた寧波の地誌が現在多數に殘つてゐるが、そこに記された魚類の種類の豐富さは全く漁業の盛大さを反映してゐるものと考へられる。寶慶四明志卷四敍產の條に

石首魚……一名鰷……蒲中者曰石筍。三四月業海人。每以潮汛覔往採之。曰洋山魚。舟人連七郡。出洋取之者多。至百萬艘。と見えるのもいかに漁業が盛大であつたかを物語る一證左である。

元來この地方は、寶慶四明志卷四敍產に

明之穀有早禾。有中禾。有晚禾。……一歲之入。非衍？不足贍一邦之民。……州郡至取米于廣。以救荒。市區斗爲錢數百。

とあり、大德四明志卷四五穀の條に

田之近山者多旱乾。近海者多斥鹵。粳與糯咸不宜焉。則平土能有幾何。故歲得上熟。僅可供州民數月之食。全藉浙右客艘之米濟焉。

と見えるやうに、米穀の自給自足が出來ない。かういふ點にもこの地の漁業が周圍の地理的條件――主として舟山群島の漁場の存在等――と結合して發達すべき情勢下におかれてゐる。至正四明續志卷五土產の條に

五穀之生。隨地所宜。郡居海陬。民趨漁業。況山磽地确。種藝辛苦。民無終歲之蓄。計之戶口。藉販糴者半之。故不可不備其名數務本之義也。土產庶物惟海錯居多。然亦錄所常見者。非有所略也。

と言つてゐるのは、かゝる間の事情を傳へてゐる。

かやうに漁業が發達しながら、一方に於て米穀がその住民の需用を充たすに足らぬとすれば、漁獲せる魚類を商品として遠くへ販賣して米穀類を獲得しなけれ

ばならぬ。一體魚類は腐敗し易く、生魚のまゝ遠くへ運ぶことは困難である。そこで之を永く腐敗させぬ方法が考へられる。寶慶四明志卷四敍產（至正四明續志卷五土產同）の條に

鯊魚子多而肥。夏初曝乾。可以致遠。

とあり、至正四明續志卷五土產の條に

舟人春時得之（比目魚）則曝乾爲鱐。可致遠。

と見えるやうに乾魚にする方法がある。或は又寶慶四明志卷四敍產石首魚の條に

鹽之可經年。謂之郎君鯊。

と見え、至正四明續志卷五土產の條にも

石首魚……皮軟而肉薄。用鹽醃之。破脊而枯者曰鯊。全其魚而醃曝之。謂之郎君鯊。皆可經年不壞。通商販於外方云。

と見えるやうに、鹽魚にする仕方もある。これらの方法は宋元に至つて始めて考へられたものではなく、已に古くからかゝる方法が用ひられてゐる。史記貨殖傳に「鮑千鈞」と見える鮑、禮記內則に「夏宜腒鱐」とある鱐等皆乾魚に外ならぬ。周禮天官冢宰の條に醢人が魚醢を掌るとあるが、これは已に古くから鹽魚のあつたことを示してゐる。

この外、宋元時代に至ると、

鮀魚……肉白皮赤。腹下有赤血。如芝。謂之頭然。常泛海水。則有蝦立其上。土人以姜醋食之。其白肉縷切。用礬浸。謂之水母線。可致遠。（本草圖經。至正四明續志卷五土產。）

と見えるやうに、明礬を以て魚の腐敗を防ぎ、以て遠くへ販賣する方法も考へられてゐる。

然らばこゝに問題とする魚を氷詰にして遠くへ生魚のまゝ販賣する方法は一體いかなる起原を有するものであらうか。

北支那に於ては、古くより冬季結氷を採つて之を氷室、氷井に藏する風習のあつたことは古典に多く記されてゐる。江南地方に於ても越王勾踐の氷室があつたことを越絕書外傳記地傳に傳へてゐる。併しこれらの氷室、氷井は多くは王侯貴族の所有物であり、一般庶民の生活とは殆んど關係のないものであつたらしい。氷が庶民の生活と密接なる關聯をもつのはどうも近世に入つてからのやうである。賣冰、買冰等といふ成語が多く見られるのも唐代以後であり、夏の冰に關する

詩が多く讀まれるやうになつたのも近世に入つてから後のことである。例へば南宋の楊萬里の詩の一節に（誠齋集卷十八荔枝歌）

帝城六月日卓午。市人如坎汗如雨。
賣冰一聲隔水來。行人未喫心眼開。

とある如き、冰が庶民の生活に深く喰入つて、その生活內容をいかに豐富ならしめてゐたかゞ彷彿とするではないか。

かやうに、冰が已に民衆の生活と密接なる關係をもつて來ると、冰を營業用として貯藏する方法が考へられるのは自然の勢であらう。冰廠が生魚の運送に利用せられるために發生したとて怪しむに足らぬ。管見の及ぶところでは、先にも引用したが、乾隆鄞縣志卷二八物產の條に

甬東濱江居民。多藏冰爲業。謂之冰廠。夏初鑿取以佐海魚行遠。⑨

とあるのが、冰廠の文獻に見える最初の記載である。併し、萬曆杭州府志（浙江通志卷一〇一の引く所に依る。宣統杭州府志卷八〇物產の條も同じ）によれば

石首魚一名黃魚。產於海。四五月中。杭人載冰出洋。販至省城貿之。

とある如く、已に明代に於て生魚の運搬に冰を利用してゐるから、甬江沿岸の冰廠の起原も、少くとも明代に溯ることが可能であらうと考へられる。

かやうに近世に於ては漁業の發達に伴つて冰廠が發生する。それは庶民殊に都會人の生活內容を更に豐富にする。中世までは主として特權階級の奢侈品であつた冰も、近世に至るともはや奢侈品でなくなり、普く庶民の間にゆきわたる。乾魚や鹽魚が海の幸として重寶がられた時代は已に過ぎて生々しい生魚の料理を膳に盛ることが出來るやうになつた。山海の珍味を一膳の上に蒐めて味の殿堂に享樂の生活を恣にする都人士の生活は支那人の羨望の的である。鄉鎭の地主は金が出來ると、縣城に住まんことを欲し、縣城の地主は更に省城に住まはんことを希ひ、爾後は上海の租界內に住居することを以て最大の理想としてゐたといふことであるが、これは生活の安全を得るためでもあるが、更に豐富なる奢侈生活を享樂するためでもある。宜なる哉、舟山群島の魚類は現在殆んど上海にて售銷し盡されてゐる。併し用ふる所の冰はもはや原始的な冰廠

の氷ではない。甬江の氷廠巢していくばくの運命ありや。

【補註】

① 支那省別全誌第十三卷五四七頁參照

② 鄞縣通志第五食貨志甲編農業

全縣田價估計表（民國二十年頃）

田別	等別	上	中	下
田	東鄉	一二〇元	一〇〇元	八〇元
	南鄉	一〇〇元	八〇元	六〇元
	西鄉	一〇〇元	八〇元	六〇元

③ 同書

〔鄞縣〕 梅墟之冰田。每畝在五百元左右。惟此皆因貝母與冰業之利。有以致之。

同書食貨志乙編魚鹽の條

濱江〔甬江〕一帶農田。每畝價值。在五百元以上。皆因冰業之利也。

④ 擡冰の勞賃一時間二角（民國二十年頃）が他の勞賃より高いことは次の統計表と比較すれば容易に理解せられるであらう。

鄞縣通志食貨志庚編生計、各業工匠每日工資統計表

（依據民國十九年甬報列入）

名稱	最高	最低	平均
木匠	一・〇〇元	〇・三〇元	〇・七五元
泥水匠	一・〇〇元	〇・三〇元	〇・七五元
裁縫	一・二〇元	〇・三七元	〇・七五元
石匠	〇・九〇元	〇・四〇元	〇・七〇元
車夫	一・五〇元	〇・四〇元	〇・六〇元
漆匠	一・〇〇元	〇・四〇元	〇・七〇元
理髮	二・〇〇元	〇・五〇元	〇・八〇元
棧司	一・〇〇元	〇・二八元	〇・五〇元
鞋匠	一・三〇元	〇・三五元	〇・五五元
船夫	二・〇〇元	〇・四〇元	〇・六〇元
屠夫	一・〇〇元	〇・三〇元	〇・四五元
米工	一・一〇元	〇・三〇元	〇・五〇元
搬運工人	一・〇〇元	〇・四〇元	〇・五〇元

⑤ 浙東地方を旅行して先づ感ずることは（浙東のみに限らず、特殊の地方を除く支那全體といふ方が適切かもしれぬが）樹木と稱すべきものは殆んどすべて伐採せられて、山といふ山は皆禿山になつてゐることである。かういふ現象は支那に於ては餘程古い時代から發生してゐると見えて、孟子等も牛山をその引きあひに出してゐる。宋代に於ては開封府の貴族をめぐつて屢々材木の疑獄が發生してゐるが、これは材木が當時の支那に於て大いに拂底してゐた點から起つてゐる。又鼎革の際、或は朝廷が新しい宮殿を造築する時には、陝西、

四川等の奥地から材木を都まで運搬してゐるが、その結果その價格は非常に高價なものになる。南宋等では遙か日本から檜杉等の材木を輸送して、宮殿の用材に充てゐる。現在でも寧波の輸入品の内には材木があり、重要な輸入品の一項になつてゐる。そこで、浙東に於ては材木は隨分高價を呼ぶ。浙東に於ける製鹽法の改革、即ち煎鹽法から晒鹽法に改めようとしても仲々實行が出來ないのも鹽板即ち杉板製の晒板が非常に高價な結果である。

氷廠用の材木が費廠の負擔になつてゐるのもかゝる點に理由があるやうである。

⑥ 以上氷業に關する説明は鄞縣通志食貨志乙編魚鹽の條によるものである。

⑦ 國語卷二〇越語上に

勾踐之地。南至于句無。北至于禦兒。東至于鄞。西至于姑蔑。廣運百里。

とあれば、越は今の鄞縣を含む所の浙東地方をも領有してゐたことが知られる。

⑧ 乾道四明圖經卷四定海縣の條には

梁開平三年。錢氏據吳越。以其地有魚鹽之利。始開邑。曰望海。旋改曰定海。皇朝因之。熙寧十年。割鄞縣之海晏・靈巖・太丘三鄉。隸本縣。元豐元年。復割本縣金塘鄉。屬昌國。……九域志爲上縣。

と見えるやうに、定海縣の發生を魚鹽の利に基くものとしてゐるのは注目に値する。之を逆に言へばこの地方の漁業は五代の頃から大いに發達したものと考へることが出來るであらう。

⑨ 乾隆鄞縣志卷二八物産、石首魚の條には

春末夏初。佐以藏冰。曰冰鮮。聞志

といへる如く、聞氏の康熙鄞縣志を引いて、冰詰にした生魚を冰鮮といふと見えてゐる。

〔附記〕 本稿は筆者が本年四月一日から十六日にかけて浙東地方を旅行した時、船上から冰廠を遠望して、その多きに驚き、且つは興味を覺えたので、歸國の後、冰廠に關する資料を渉獵してものしたものである。冰廠について直接調査をしたわけでないから細部にわたつては不明の點が多い。又起原についても更に古い資料があるかもしれぬ。編輯子の請はるゝまゝに、旅行のおぼえがきとしてこの稿を草した。大方の叱正を希ふ次第である。

（昭和十七年七月十日稿了）